

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580018

研究課題名(和文) フランシュ=コンテ社会から見たブルードン理論の現代的可能性

研究課題名(英文) Possibilities of Proudhonian social theory in the modern society, seen from Franche-Comte society

研究代表者

三浦 敦 (MIURA, Atsushi)

埼玉大学・人文社会科学部研究科(系)・教授

研究者番号：60261872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ブルードンの社会理論を、ブルードンの出身地であるフランス・フランシュ=コンテ地方の農村の慣行との連続性の中で捉えようというものである。実際、ブルードンの唱えた所有論や無償信用論などは、実はブルードンが理論を提示する前からフランシュ=コンテ地方の農民の間で慣行として行われてきたものであり、しかもその慣行を通じてフランシュ=コンテ地方は農業を現代経済に適合させてきたのであった。このように、ブルードン理論は、過去の理論ではなく、今日の農民の経済戦略の中に具現化しているものであり、そこにブルードン理論の現代における可能性がみられるのである。

研究成果の概要(英文)：This study aims at examining the social theory of French socialist Proudhon through comparison with the customary social practice of peasants in the socialist's motherland, Franche-Comte. In fact, what Proudhon presented in his study on the property rights and the gratuitous credit was already in practice among these peasants in the first half of the 19th century, before the Proudhonien theorization. Furthermore, agriculture in Franche-Comte has been modernized through these 'communitarian' customs. Therefore, Proudhonien ideas are not something belonging to the past, but living in modern peasant economic strategies. Here, we find the possibility of the Proudhonien theory in the modern society.

研究分野：農村社会研究

キーワード：ブルードン フランシュ=コンテ地方 労働所有論 アソシエーション 土地所有

1. 研究開始当初の背景

ブルードンの思想は従来、谷川稔らの社会史的研究や何人かの思想史的研究を別にすればほとんどマルクスとの関係で議論され、しかもその多くの場合は否定的な評価がなされてきた。しかし他方で近年は、ゲゼルの地域通貨論や共有資源(コモンズ)が注目されるなか、ブルードンも改めて注目され、ブルードン理論の現代市場社会の諸問題解決への有効性を論じる議論が生まれつつある。

ところで、従来の研究ではブルードン理論が持つ社会的意味を、ブルードンがその理論を育んだ、故郷のフランシュ=コンテ農村社会を参照することで、明らかなという試みは、全くなされてこなかった。しかし、若き日のブルードンがどのように社会理論を構想したのかという問題は、どのような社会的環境のなかに身を置いてどのような現実を見ていたのかという問題と不可分であるはずである。

こうしてみると興味深い事実が気がつく、すなわち、ブルードンが唱えた所有論や無償信用論は、実は、19世紀のフランシュ=コンテ農村の社会慣行と極めて類似しているということである。さらに、フランシュ=コンテ地方のそうした社会慣習が非市場社会的特徴を持ち続けていることから、さまざまな批判にも関わらずブルードン理論は、実は農村社会の実態をよく反映した極めて現実的な理論であり、当時における実際的な非市場的社会システムの提案だったのではないかと考えられる。また、似たような慣行はフランスのみではなく他の非ヨーロッパ農村社会にもしばしば見られるということである。他方でブルードン理論は資本主義社会批判の理論でもあるため、農村の諸慣行が現代資本主義社会に生きる我々になんらかの新たな方向性を示すのではないかという可能性を示している。実際、フランシュ=コンテ

社会は、19世紀以降の市場社会化に際して中世以来の共同体的社会慣行が重要な役割を果たして現在に至っているが、このことは、ブルードンらの19世紀の社会主義者が理想を託した、アソシエーションの可能性を現代において証明しているものと読むことができる。

本研究では、いままでの思想史的研究と、農村史研究や社会学・人類学のフランシュ=コンテ社会研究の成果を総合し、ブルードン理論を現実の農村社会の歴史的社会的コンテキストの中に位置づけて再評価し、あわせてゲゼルなどブルードンの影響を受けた論者の議論も踏まえて、このブルードン理論と実際の農村社会との関係が現代社会に与える展望を検討する。

2. 研究の目的

19世紀の思想家ブルードンの社会理論(所有論、無償信用論、アソシエーション論など)には、彼の出身地フランシュ=コンテ地方の、当時の社会的現実や中世以来の社会慣行が反映されていると考えられる。そこで本研究では、農村史研究や社会学・人類学のフランシュ=コンテ社会研究の成果を総合し、ブルードン理論を現実の農村社会の歴史的社会的コンテキストの中に位置づけて再評価することで、ブルードン理論と実際の農村社会との関係が現代社会に与える展望を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、ブルードン理論(特にその所有論、無償信用論、および「経済的諸矛盾の体型」等の初期から中期の議論)と、19世紀のフランシュ=コンテ農村の社会システムを付き合わせ、さらには現代の途上国の社会状況をも参照することで、ブルードン理論の意

味を検討する。フランシュ=コンテ農村や途上国農村の状況については、種々の報告書や研究文献を検討するほか、研究代表者自身が行ってきた農村調査のデータも活用する。

4. 研究成果

(1) ブルードン理論の社会的背景

思想家として活躍する前に、ブルードンは編集者として仕事をしていたことがあったが、その際に森林の分割に関する訴訟に関わり、その訴訟文書の作成に携わったことがあった。この訴訟は、高地ジュラにあった広大なラ・オート・ジュー (La Haute-Joux) の森林に関して、その領主であったアーレンベルク公が、その半分を周辺の自治体へ払い下げるにあたって、その森林の自治体間での分割方法を巡って行われたものであった。この訴訟文書を分析したクロード=イザベル・ブル口 (Claude-Isabelle Brelot) は、青年ブルードンが所有の問題について深く関わりそれについて考え始めたのは、この訴訟がきっかけだったと指摘する。この地方では森林は、その土地の所有者にかかわらず隣接する村の人々が生活のために森林資源を自由に活用する、アフアーージュという慣習的な権利を持っていたが、この慣習は明らかにブルードンの所有論と極めて類似したものであった。

同様に、ブルードンの所有論に近い農民慣習として、収穫の終わった土地に関しては土地所有者の権利が一時的に反故にされ、村の人すべてに土地が解放されるという、北フランスで広く見られる共同放牧の慣行がある。中世にさかのぼるこの慣習は、私的所有権をないがしろにするとして、知識人や領主たちから批判され、近世以降、相次いで廃止されていったが、フランシュ=コンテ地方においては、領主からも農民からも、利益があるとして共同放牧の存続が訴えられ、農業人口の減少と農業経営の集約化が進んだ 1950 年代

まで続けられた。この共同放牧の根底には「労働投下の成果は労働を投下したものの所有となるが、それ以外のものを人が所有することは正当化できない」というアフアーージュと同じ論理が、その農民的正義を基礎付けていた。

19 世紀のフランシュ=コンテ農村はまた、フリユイティエールと呼ばれる独特のチーズ生産組合の急速な発展によって特徴付けられるが、このチーズ生産組合の組織原理もまた、同じ原理に基礎を置いている。このチーズ組合は、牛乳を生産したこの農民がその牛乳を持ち寄って、大きなグリュイエール・タイプのチーズを作るための組合であり、貨幣経済の浸透とともに特に 18 世紀から急速に各村で設立されていったものであり、フランシュ=コンテ農業を資本主義経済に適応させる鍵となり、今日でもフランシュ=コンテ農業の主要な柱となっている。そしてその根底の組織原理も、各農家は自分の生産した牛乳の分だけ報酬を得るという、共同放牧を支える論理と同じ論理に基づいている。19 世紀には一時期、チーズ生産組合は有力農家が不当に自分の利益を得ようとしたが、しかしそれに対して他の農民たちは大きく反発し、結局、有力農家が不当な利益を得ることができないようなシステムに改められていったが、この有力農家による不当な利益は、ブルードンが「所有は盗みである」と述べた事態と正確に対応している。

また、当時のフランシュ=コンテ農村は、貨幣経済が徐々に浸透していたとはいえ、農村内部ではまだ非貨幣的な財の循環が見られたが、こうした財の循環は、ブルードンが無償信用として理論化しようとした経済活動そのものとはいえないまでも、ブルードンはこうした慣習的経済の中に、資本主義の問題に対する回答を見出していたということができる。

このような、フランシュ=コンテ農村の

種々の慣習とブルードン理論との連続性は、ブルードンが農民たちの行動を観察し、その中に資本主義の問題に対処する方法の端緒を見出したことを示している。

(2) ブルードン理論と農民的正義

ブルードンは、社会システムだけでなく、その根底にある「社会的なるもの le social」のあり方も検討し、「相互性」「均衡」といった諸概念を提示した。そしてブルードンはさらに『革命と教会における正義』において、この概念から出発して種々の社会的概念と社会関係の創出を論じている。この相互性や均衡は、フランシュ＝コンテ農村社会の人間関係の基礎に関わっており、人びとの行動を規制する「妬み」「礼儀ただしさ」といった文化コードなどによって実現されている。そしてこのように秩序づけられた人間関係が、一定の意見の形成を促し、公共空間を基礎付けている。

(3) 今日のフランシュ＝コンテ社会とブルードン理論

今日のフランシュ＝コンテ農村は、19世紀半ばから大きく変化している。人口は大きく減少し、農業はヨーロッパ共通農業政策の枠の中におかれている。とはいえ、農民の実際の行動は、今でもブルードンの時代と同じ労働所有論的原則に従っている。その一つの例が、農民の土地取引の例である。すでに共同放牧は1950年代には姿を消したが、均等相続により各地に分散した土地を適切なところに配置するために、農民は様々な土地取引戦略を展開するが、その際に原則となるのは、この労働所有論的な原則なのである。また、チーズ生産組合は今日でもフランシュ＝コンテ農業の鍵となっているが、その組織原理もやはり19世紀のままなのである。

また、興味深いことに、フランシュ＝コンテのチーズ生産組合では、小規模の組合の方

が良い経済パフォーマンスを示している。これは、一見、規模の経済に反する現象のように見えるが、しかし個々の農民同士の「礼儀正しく相互的な社会関係の上に立った、民主的な意思決定を基礎としているチーズ生産組合においては、規模の大きさは取引費用の増大とそれによる内的コントロールの緩みを招き、それによって生産活動は非効率的となるのである。このようなアソシエーションにとって規模が必ずしも有利に働くとは言えないことも、すでにブルードンが指摘していたことであった。

しかしながら、他方で、ブルードン理論の19世紀的限界も明らかになる。ブルードン理論の労働所有論的原則と類似した所有論に基づく組織論は、今日の企業組織論の基礎理論の一つである、アルチアン＝デムゼッツの企業組織論にも見えるが、この現代の企業組織論では、分割不可能な財の問題が議論されているが、この点はブルードンのアソシエーション論では十分には分析されてはいなかった。また、同様にブルードンの所有論では財と所有主体とが1対1で結びつけられるという近代主義的前提が貫かれているが、今日の所有論では所有の重合性が指摘されており、今日のフランシュ＝コンテ農村や途上国の農村でも、そうした重合性が資源利用におけるアンチ＝コモنزの悲劇を回避するメカニズムとして機能している。

(4) 途上国の貧困削減とブルードン理論

フランシュ＝コンテの農民の間に見られる労働所有観は、実はフランスだけではなく、アフリカ、東南アジア、北アメリカなど、世界各地の伝統的農村社会にも見られるものである。このことは、ブルードン理論がこれらの地域の農村開発に示唆を与える可能性を示している。世界各地で進行しているランド・グラビングは、こうした労働所有観的慣行を否定するものであるため、農民的正義に

反しているだけでなく、アンチコモنزの悲劇を引き起こし、農村経済の適切な機能性を損なうことになる。

ただし、すでに見たような欠陥を持つため、ブルードン理論をそのまま当てはめることはできない。これらの土地でも所有権は重層的となっている。こうしたことから、現代の農村問題を考える際には、ブルードン理論の可能性に着目しつつも、ブルードン以降の知見をさらに取り入れた理論の発展を試みる必要がある。

< 参考文献 >

ALCHIAN, Armen and DEMSETZ, Harold (1972) Production, Information Costs, and Economic Organization, *American Economic Review*, 62(5): 777-795.

BRELOT, Claude-Isabelle (1979) Pour une histoire de la forêt en Franche-Comté, procès de la Haute-Joux, *Travaux de la Société d'Emulation du Jura 1977-1978*, Lons-le-Saunier, Société d'Emulation du Jura, pp. 181-225.

MAYAUD, Jean-Luc (1986) *Les secondes républiques du Doubs*, Paris, Belles Lettres.

PROUDHON Pierre-Joseph (1840), *Qu'est-ce que la propriété ?*, Paris, J.-F. Brocard.

— (1846), *Système des contradictions économiques, ou la philosophie de la misère, I et II*, Paris, Guillaumin.

— (1846), *Manuel du spéculateur à la bourse*, 4^e édition, Paris, Garnier frères.

— (1851), *Idée générale de la révolution au XIX^e siècle*, Paris, Garnier frères.

— (1960), *Carnets de P.-J. Proudhon, vol. 1*, Paris, Marcel Rivière.

— (1961), *Carnets de P.-J. Proudhon, vol. 2*, Paris, Marcel Rivière.

SEJ (Société d'Emulation du Jura) (1953) *Enquête sur le Jura depuis cent ans: étude sur*

l'évolution économique et sociale d'un département français de 1850 à 1950, Lons-le-Saunier.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

Atsushi Miura, 2016, Cultures différentes, évolutions similaires : histoire foncière et évolution économique aux Philippines et au Sénégal dans une perspective comparative, 『埼玉大学紀要・教養学部』第 51 巻第 2 号, p. 345-360.

Atsushi Miura, 2016, Appropriation and Re-appropriation of Lands Since the 16th Century in Bohol, Philippines, 『埼玉大学紀要・教養学部』第 51 巻第 2 号, p. 333-343.

Atsushi Miura, 2016, Les idées proudhoniennes comme une « ethno-sociologie » : économie rurale en Franche-Comté et ailleurs, in Gilles Ferréol, Bruno Laffort, et Alexandre Pagès (dirs), *Le monde rural : entre permanences et mutations*, Louvain-la-Neuve : EME éditions, p. 85-99.

三浦敦, 2016, セネガルの土地改革 : 経済自由化の中で残存する慣習的土地制度, 『アジア経済』第 57 巻第 1 号, p. 34-62.

三浦敦, 2016, 市民社会と協同組合 : フィリピンとセネガルにおける農村アソシエーションの展開, 信田隆宏編『グローバル支援の人類学』大阪: 国立民族学博物館 (印刷中) .

Atsushi Miura, 2016, Gestion coutumière de la production maraîchère face au marché globalisant au Sénégal, in Maurice Blanc, S. Ndiaye, C. S. Sakho et Josianne Stoessel-Ritz (dirs.), *Développement durable, représentations sociales et innovations sociales*, Strasbourg :

Presses Universitaires de Strasbourg (sous presse).

Atsushi Miura, 2016, Dynamisme des systèmes fonciers imbriqués aux Philippines depuis le 16^e siècle, in Pablo Luna (dir.), *Appropriation et réappropriation des terres et des ressources naturelles, et leur dynamisme du XVI^e au XXI^e siècles*, Paris : Syllepse (sous presse).

Atsushi Miura, 2013, Sociability and Associations in Rural French Jura: Justice, Property Rights, and Moral Economy, Akiko Mori (ed.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social (Senri Ethnological Studies no. 81)*, p. 67-96.

三浦敦, 2013 セネガルの農村組織 : ママドゥ・ジャの協同組合政策と農村組織の発展, 『埼玉大学紀要・教養学部』第49巻第1号, p. 223- 238.

[学会発表](計7件)

三浦敦, 2015, 「現代市場社会における非私的所有の持続可能性と協同的機能 : セネガルにおける多重レイヤーシステムの社会的経済」社会人類学研究会(於首都大学東京)での発表, 11月20日.

Atsushi Miura, 2015, “Appropriation and Re-appropriation of Lands in Bohol, the Philippines,” paper presented at the 5th International Conference of European Rural History Organisation, (Universitat de Girona, Girona), the 10th September.

Atsushi Miura, 2015, « Gestion coutumière de la production agricole face au marché globalisant dans les Niayes, Sénégal, » communication donné au 6e séminaire international du 2DLIS, « Développement durable, représentations sociales et innovations sociales », (Université de Gaston Berger,

Saint-Louis, Sénégal), le 11 mai.

Atsushi Miura, 2014, « Le fondement social de l'idée proudhonienne et ses implications pour les études actuelles de la société rurale. Un exemple avec le changement du système des fruitières en Franche-Comté au XIX^e siècle, » communication donnée à la Journée d'étude interdisciplinaire « Le monde rural, entre ruptures et continuité », (Université de Franche-Comté, Besançon), le 21 novembre.

Atsushi Miura, 2014, « Stratégie des petits exploitants agricoles face à l'économie de marché dans la production maraîchère des Niayes, Sénégal, » communication donnée au Colloque international « Les petites paysanneries dans un contexte mondial incertain », (Université de Paris Ouest, Nanterre), le 20 novembre.

Atsushi Miura, 2014, « Système social traditionnel et marché moderne chez les exploitants philippins à Bohol, » communication donnée à la Journée interaxes sur l'agro-alimentaire (LADYSS à l'Université de Paris I, Paris), le 30 juin.

三浦敦, 2013, 「セネガルの農民組織 ~ ママドゥ・ジャの思想と FONGS の展開」東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」2013年度第4回公開セミナー(東京外国語大学[東京都府中市])での発表, 9月14日.

6. 研究組織

(1)研究代表者

三浦 敦 (MIURA, Atsushi)

埼玉大学人文社会科学部研究科・教授

研究者番号 : 60261872